

川越における近世以降の火災の被害と蔵造りに関する考察

辻本研究室 5110015 小野澤 拓

1. 研究目的

『江戸の都市計画』^①では、明暦の大火（1657）後に「江戸の復興は、誰が行うかということが協議された時に、信綱は真っ先に手を挙げた。他の老中たちも異論はなかった。というのは、松平信綱（1596～1662年）は川越城主であった時に、すでに、川越の大火といわれた寛永15年（1638）の川越の大火後に、見事な復興計画を立て、実行したばかりだったからである。」と記されている。川越の大火（1638）を調べることによって江戸の防火体制を知ることができると考え、寛永10年（1633）から大正11年（1922）までの川越の火災の被害を分析した。

2. 松平信綱の入封とその後の川越

松平信綱は寛永16年（1639）1月5日川越に入封した。信綱の入封以前の寛永15年（1638）1月28日の川越大火で城郭の大部分と城下町の一部を失った。信綱は、川越城を再建し、川越城の拡張に伴い、城下も都市計画の一部として十カ町^{注1)}という市街地の商業要素の集中した地域を設けた。^{②、③}

2.1 地域の広がりと人口の推移

松平信綱による十カ町の整備以降それをベースに（表1）で表したように各村との合併を繰り返し、大正11年には、川越市となり埼玉県内では初めて市制が施行された。旧川越町は2.86km²、川越町は8.35km²、川越市は14.22km²と拡大していった。それに伴い、人口も明治22年（1889）の合併直前は9861人に対し、合併直後は、15643人となり、地域が広がったことにより、人口も増え続け、大正11年（1922）の合併直後30359人にまで増加し、30年ほどで2倍と著しく増加している。

表1 川越市の合併の歴史^④

1869年以前	1889年(明治22年)	1922年(大正11年)
旧川越町 ^{注2)}	川越町	川越市
松郷		
東明寺村		
寺井村		
小久保村		
脇田村		
小仙波村		
野田村(一部)	仙波村	
大仙波村		
大仙波新田		
岸村		
新宿村		

3. 川越の火災被害

1633年から1922年までの間に川越では、わかっているだけで84件の火災（規模は問わず、出火が確認できたもの）が発生している。

防火対策として初めて講じられたのは、文献^⑤によると享保3年（1718）の火災とされている。この時に松平信綱はすでに亡くなっていて、防火対策に関わったとは断言できない。

ここで江戸との火災の比較をしてみる。

市域、人口などが大きく違うため、数値としては、比較にならないが、（図2）では冬に出火が多く、夏には少ないという部分では、共通し（図3）1700年代前半と後半に川越、江戸ともに火災が急増している。

（江戸の458件に関しては、焼失面積1653m²以上のもの）

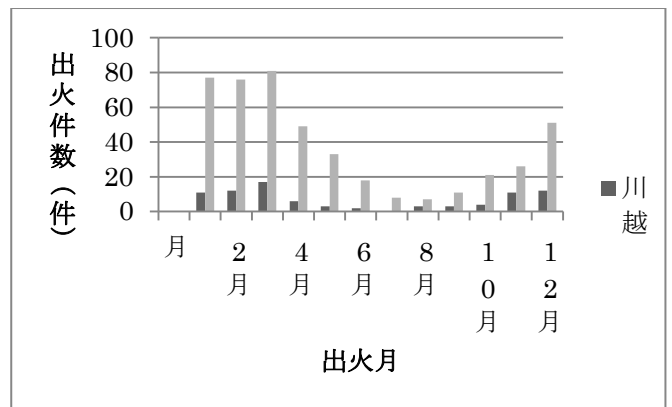


図2 月別出火数(全 川越 84 件 江戸 458 件)^{⑥、⑦、⑧}

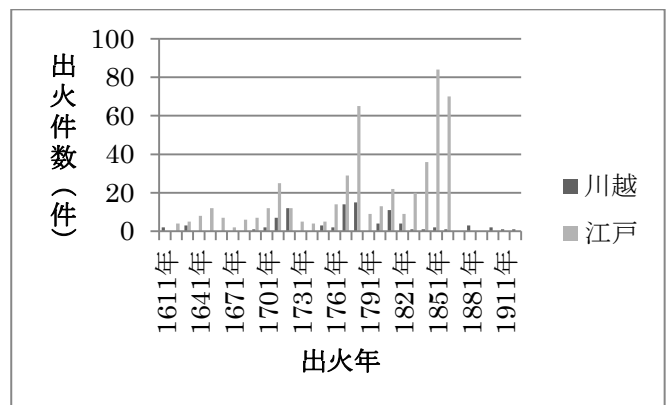


図3 10年毎の出火数(全 川越 84 件 江戸 458 件)^{⑥、⑦、⑧}

次に、発生した火災の状況を知るために文献^{⑥、⑦}を参考に

地図上に火出点（確認できるだけで 43 件）をとされる町を地図上^④にプロットしていき、ほかの町への延焼が文章によって確認できた 7 件火災に関しては、火出点以外に燃え広がったとされる町もプロットし、火出点と結ぶことによって焼失方向、焼失面積を分析することができた。焼失方向が分析できた火災を（図 5）と比較すると焼失面積が 1km²以上と広い①、②、⑦の火災は、風向と焼失方向が一致することがわかった。（図 4）

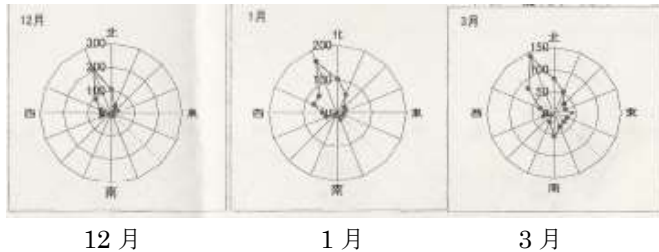


図 4 川越の風向風配図^⑧

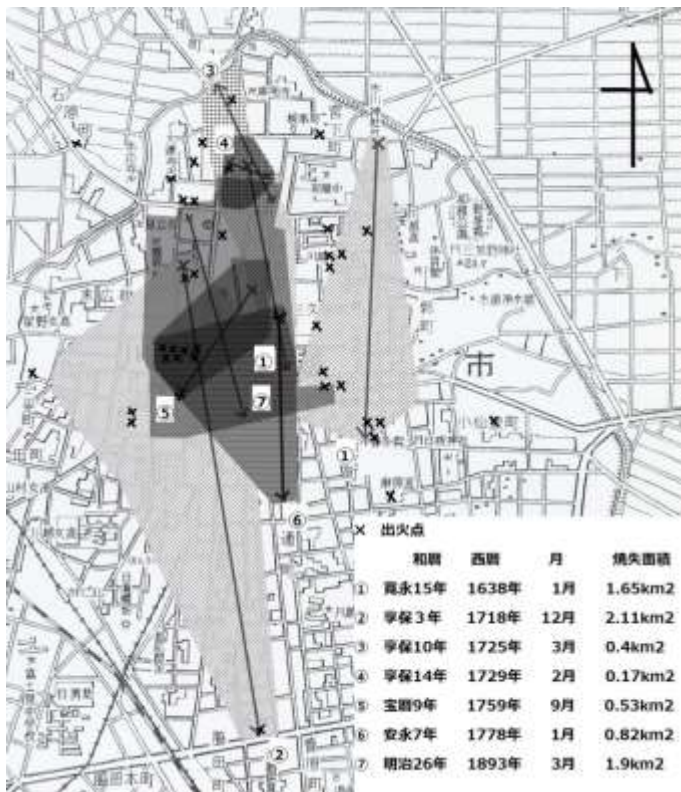


図 5 1633 年から 1922 年までの火出点と焼失面積^{⑥、⑦、④}

4. 川越と蔵造り建物の概要

蔵造りとは、防火の目的をもって建物の壁体を土蔵としたもので、江戸では享保年間（1716～35）に幕府が防火建築として土蔵造り・塗家造り^{注2）}を奨励したことにはじまる。川越に蔵造り・塗家造りの商家が建ち並んだのは明治 26 年の川越大火以降とされている。この大火は明治 26 年（1893）3 月 17 日午後 8 時ごろに養寿院門前より出火し、当時の川越町 3315 戸の 1/3 にあたる 1302 戸を焼失した。（図一3）から大火の中、9 件の土蔵造りが焼け残り、土蔵造り繁栄のきっかけとなったのではないかと^{⑨、⑩}

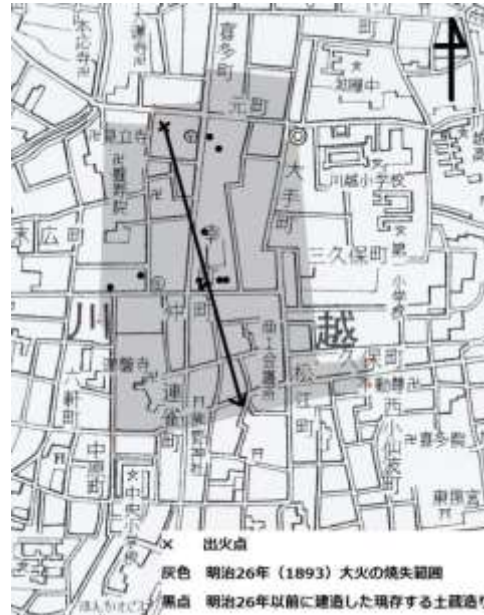


図 6 明治 26 年大火の状況と土蔵造りの分布^{⑥、⑦、④}

（図 6）から大火の中、9 件の土蔵造りが焼け残り、土蔵造り繁栄のきっかけとなったのではないかと。

5. まとめ

松平信綱は大火（1638 年）を契機に川越に入封してきたわけだが、川越城、十カ町の整備、野火止用水の開墾などは行ったが防火対策に関わったことが明確でない。ゆえに文献^①にあるような明暦の大火と川越大火の因果関係を証明することができなかった。

注 1) 十カ町・・・市街地の商業要素の集中した地域に上五カ町を商人町、下五カ町（を職人町とした町割を行った。これは、現在の町の元となっている。当時の行政区というわけではない。
 注 2) 旧川越町・・・十カ町に加え、7つの町によって構成されている。
 注 3) 塗家造り・・・一般的に大壁造りと呼ばれるもので、壁を漆喰仕上げとする。江戸時代には、武家屋敷の長屋門などに多く用いられ、土蔵製の壁より少し薄いのが一般的である。

参考文献

① 童門冬二、『江戸の都市計画』文藝春秋、1999 年
 ② 中村彰彦、『知恵伊豆と呼ばれた男』講談社、2009 年
 ③ 川越市立博物館、『知恵伊豆 信綱』川越市立博物館、2010 年
 ④ 川越市、『川越市史第 4 巻近代編』東京印書館、1985 年
 ⑤ 板倉良矩、『川越素種』川越図書館、1917 年
 ⑥ 川越市、『川越市史年表』東京印書館、1986 年
 ⑦ 川越市立博物館、『川越大火百年』川越市立博物館、1993 年
 ⑧ 西田幸夫、『考証 江戸の火災は被害が少なかったのか？』住宅新報社、2006 年（江戸に関するデータ）
 ⑨ 川越市役所提供、『川越の風配図 [2012 年]』
 ⑩ 川越市、『日本の町並み調査報告書集成 3 関東の町並み』東洋書林、2004 年
 ⑪ 川越市観光協会、『小江戸残照』川越市観光協会、1995 年
 参考地図
 ⑬ 著者不明、『川越市街図 [1/20000]』塔文社、19